主題名 「いただきます」を考えよう 3 - (2)

対象：小学校高学年

主題設定の背景

高学年の子どもは、育ち盛りということもあり給食をよく食べ、食缶に残ることはあまりない。しかし、一人一人を見ると、野菜や魚など好き嫌いがある子どもや少食の子どももいて、全員が何でも残さずに食べているとはいえない。また、食事を楽しんでいる子どもは多いが、動物や植物の命をいただいていることを意識して食事している子どもは少ない。

資料とその取り扱い 資料「大漁」(金子みすゞ 全集)

金子みすゞの詩「大漁」は、喜びと悲しみを対比させるところに特徴がある。大漁の喜びについてより深く考えることによって、いわしの気持ちについても自然に思いをめぐらすことができる。浜は祭りと海の中はとむらい。この二つを対比させることで、大漁の喜びの裏にいわしの悲しみがあることを気付かせていく。いつもおいしく食べている食事は、実はたくさんの命をいただいているのだということを意識させたい。さらに、「いただきます」の重みに気付かせるとともに、大切な命だからこそ残さずに食べようという態度を育てたい。

ねらい

自分の命がたくさんの命のうえに成り立っていることに気付かせ、大切な命を残さずいただくとする態度を育てる。

	活動の内容	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1 食事の食べ残しについて考える。	給食や家での食事のとき、嫌いな食べ物があるとどうしますか。 ・我慢して食べる ・半分だけ食べる ・食べずに残す	・事前にアンケートを取り、意見をまとめたものを提示する ・クラスの1週間の給食の食べ残しを調べておき、提示する。
展開	2 資料「大漁」の詩を読む。		・漁をしているところの写真や大漁旗の写真、魚がたくさん水揚げされている写真を提示する。 ・漁師の苦労が分かるように具体的な場面について話し合わせる。
	3 漁師の仕事の大変さや大漁のときの漁師の気持ちを考える。	漁師が大変なことはどんなことだと思いますか。 ・危険なことがある ・魚が獲れる量が一定ではない ・天候に左右される 大漁のときの漁師の気持ちはどうだろう。 ・日ごろの苦労があるから嬉しい ・収入があるぞ、家族も喜ぶだろう ・ありがたい恵みだ	・「大漁」の詩の中にある浜の祭りの様子を想像させ、大漁のときの漁師の喜びと自然への感謝の気持ちに気付かせたい。
	4 いわしの気持ちを考える。	いわしたちはどんなことを考えているのだろう。 ・家族や仲間が捕られて悲しい ・みんながいなくなるとさびしい ・自分たちを捕らないでほしい	・いわしの悲しさ、ただ食べられていくいわしの命、もっと生きていたいわしの命があることに気付かせる。
	5 「漁」といわしの命について考える。	漁をすることについて、どう思いますか。 ・人はいろいろなものを食べないと生きていけない、仕方ない ・人だけがいろんな命を食べて、いけないのではないか	・いわしの気持ちやいわしの命を考えながら、自然界の「食べる」「食べられる」の関係に気付かせる。 ・命をいただくことへの心の葛藤があることもおさえておく。

	6 いただいた命と自分について考える	<ul style="list-style-type: none"> ・いわしがかわいそうだけど、食べるためには仕方ない ・生きていくためには、いわしも他の命を食べているから、仕方ない <p>自分の命についてどんなことに気付きましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の命には、他の命が取り込まれて成り立っている ・命をいただいていることを感謝し、無駄にしない ・他の命の分まで、一生懸命生きることが大事 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべての命が繋がって、支えられていることに気付かせる。 ・自分の命の中に、他の命が取り込まれて一緒に生きているということを基に、命を大切にしたいという気持ちを高める。
終末	7 これからの自分について考えさせる。	<p>今までの食生活を振り返らせ、これからの生活で心掛けたいことを考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食べ物に感謝して、残さずに食べたい ・命をもらったのだから、自分の命も大切にしていきたい ・ありがとうと言う気持ちで「いただきます」と言いたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・動物や野菜を食べるということは、その命をいただいて、そのおかげで生きているということを伝える。 <p>資料「いのちはめぐる」 (参考文献：『食の総合学習 1 食といのち』)</p>
備考	<ul style="list-style-type: none"> ・給食の食べ残しが多い場合は、写真をとっておき提示するのも有効と考える。 ・漁業が子どもの生活の中で身近にない場合は、漁業の苦労や大漁のときの喜びが考えやすいように写真などの資料を用意するなどの手立てが必要である。 ・事前のアンケートの結果を掲示しておく、今までの生活を振り返る際にこれから心がけたいことが考えやすい。 ・終末では資料(下参照)を基に、動物や植物の命をいただいて生きていることを伝えるが、「食物連鎖」とい言葉には、触れないようにする。 		

資料「いのちはめぐる」

食べる・食べられる

動物はすべて、ほかの生き物を食べなくては、生きていけません。それはなぜでしょう。植物も動物も、生きていくためには、体のもとをつくる栄養が必要です。植物は光合成によって、栄養をつくることができます。

しかし動物は、光合成の能力をもっていません。そのため、動物は植物がつくった栄養をもらって、体のもとをつくります。植物がつくった栄養をもらう方法とは、植物を食べることです。

植物は草食動物に食べられ、その体の中で栄養が変わります。草食動物は肉食動物に食べられ、やはり栄養が変わります。そして、動物が死ぬと、その死骸は、土壌生物によって、分解され土の中にとけこみ、植物が成長する養分として使われます。このように自然界は「食べる・食べられる」という関係が輪のようにつらなっています。

この中のどの生き物が欠けても、すべての生き物に影響が出るのです。人間も同じです。地球上のあらゆる生き物はすべて、お互いのいのちでささえあっているのです。

〔参考文献〕 尾 純 著 『食の総合学習 1 食といのち 食べ物が体をつくる』あかね書房